



# 夢への挑戦!



自信と誇りと感謝を胸に!

小野中学校だより

第 22 号

文責：校長 大河原久宗

2019. 11. 7. THU

TEL:72-3355 FAX:72-2829

## <教育目標>

- 【夢～自立・友愛・健康】
- ・課題を持ち、進んで学ぶ生徒
- ・互いのよさを認め、高めあう生徒
- ・健康で、心身を鍛える生徒



## 「校長の読み聞かせ！」

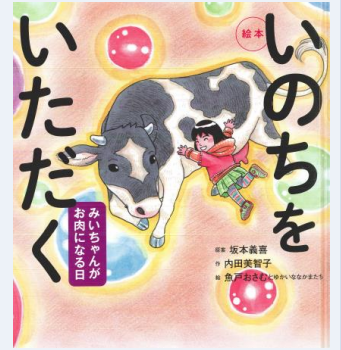
平成30年度3学期から始めた「校長による絵本の読み聞かせ」、昨年度は「あなのあいたおけ」を紹介しました。今年度は「いのちをいただく～みいちゃんがお肉になる日～」【講談社】の紹介です。

### ☆『いのちをいただく～みいちゃんがお肉になる日～』

食べ物が満ちあふれている時代に、食べ物のありがたみを伝えることは難しい。食べ物を粗末にしてはならないと、教えることは難しい。その食べ物が、既に粗末にされている。日本の1年間の食品廃棄量は2000万トン以上。1人1日1800Kcalで生活している発展途上国での3300万人の年間食料に相当する。そんな時代に、どのようにして食べ物のありがたみを伝えるか。「命」でしかないのだと思う。

私たちは食べ物を食べて生きている。生きることは食べること。すべての食べ物は命だ。肉も魚も野菜も米も、すべてが種を残そうとする生命体だ。人が生きるということは、命をいただくこと。殺すこと。

私たちの命は、多くの命に支えられている。それを実感したときに、食べ物のありがたみがわかる。食べ物を粗末にしてはならないとわかる。

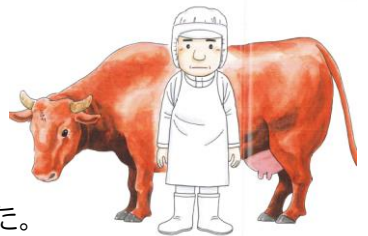


坂本さんは、食肉センターにつとめています。

牛のいのちを解いて、お肉にする仕事です。

坂本さんは、この仕事がずっといやでした。

牛を解く人がいなければ、牛の肉はだれも食べられません。だから、たいせつな仕事だということはわかっています。でも、牛と目があうたびに、仕事がいやになるのです。



「いつかやめよう、いつかやめよう」とおもいながら仕事をしていました。

坂本さんの子どもは小学三年生です。しのぶくんという男の子です。

ある日、小学校から授業参観のおしらせがありました。これまでは、しのぶくんのおかあさんがいっていたのですが、その日は用事があって、どうしてもいけませんでした。そこで、坂本さんが授業参観に行くことになりました。

いよいよ、参観日がやってきました。「しのぶは、ちゃんと手をあげて発表できるやろうか」坂本さんは、期待と少しの心配をいだきながら、小学校の門をくぐりました。

授業参観は、社会科の「いろんな仕事」という授業でした。先生が子どもたちひとりひとりに、「おとうさん、おかあさんの仕事をしていますか?」「どんな仕事ですか?」とたずねていました。しのぶくんのばんになりました。坂本さんはしのぶくんに、しのぶの仕事について、あまりはなしたことがありませんでした。なんとこたえるのだろうと不安におもっていると、しのぶくんは、ちいさな声でいいました。

「肉屋です。ふつの肉屋です」

坂本さんは「そうかぁ」とつぶやきました。

坂本さんが家で新聞をよんでいると、しのぶくんがかえってきました。

「おとうさんが仕事ばせんと、みんなが肉ば食べれんとやね」  
なんで急にそんなことをいいたすのだろう、と、坂本さんがふしぎにおもってききかえすと、しのぶくんは学校のかえりぎわ、担任の先生よびとめられて、こういわれたというのです。



「坂本、なんでおとうさんの仕事ば、ふつうの肉屋てゆうたとや？」  
「ばってん、カッコわるかもん。一回、みたことがあるばってん、血のいっばいついてから、カッコわるかもん」

「坂本、おまえのおとうさんが仕事ばせんと、先生も、坂本も、校長先生も、会社の社長さんも肉ば食べれんとぞ。すこか仕事ぞ」

しのぶくんはそこまで一気にしゃべり、さいごに「おとうさんの仕事はすこかとやね」といいました。そのことばをきいて、坂本さんはもうすこし、仕事をつげようかなとおもいました。

ある日、一日の仕事をおえた坂本さんが、事務所でやすんでいると、一台のトラックが、食肉センターの門をくぐってきました。荷台には、あした、肉になる予定の牛がつかまえていました。坂本さんが「あしたの牛ばいねえ〜」とおもってみていると、助手席から十歳ぐらいの女の子が、とびおりました。そして、そのままトラックの荷台に、あがっていきました。坂本さんは「あぶなかねえ」とおもっていましたが、しばらくたってもおりてこないの、心配になってトラックにちかづいてみました。

すると、女の子が、牛にはなしかけている声がきこえてきました。「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃんが肉にならんと お正月がこんて、じいちゃんのいわすけん。みいちゃんば売らんとみんながくらせんけん。ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ」

そういいながら、いっしょうけんめいに、牛の腹をさすっていました。坂本さんは「みなきゃよかった」とおもいました。

トラックの運転席から、女の子のおじいちゃんがおりてきて、坂本さんに頭をさげました。「坂本さん、みいちゃんは、この子といっしょにそだちました。だけん、ずっと、うちにおいとくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんと、この子にお年玉も、クリスマスプレゼントも買ってやれんとぞ。あしたは、どうぞ、よろしくおねがいます。」

坂本さんはまた、「この仕事はやめよう。もうできん」とおもいました。そして、おもいついたのが、あしたの仕事をやすむことでした。

坂本さんは家にかえり、みいちゃんと女の子のことを、しのぶくんにはなしました。「おとうさんは、みいちゃんを肉にすることはできんけん、あしたは仕事をやすもうとおもっとる」そういうと、しのぶくんは「ふ〜ん」といって、しばらくだまったあと、テレビに目をうつしました。その夜、いつものように坂本さんは、しのぶくんといっしょにおふろにはいりました。しのぶくんは、坂本さんの背中をながしながらいいました。「おとうさん、やっぱり、おとうさんがしてやったほうがよかよ。心のなか人がしたら、牛がくるしむけん。おとうさんがしてやんなせ」坂本さんはだまってきいていましたが、それでも、決心はかわりませんでした。

朝、坂本さんは、しのぶくんが小学校にでかけるのを、まっていた。

「いってくるけん！」元気な声と、とびらをあける音がしました。その直後、玄関がまたひらいて「おとうさん、きょうはいかないけんよ！」「わかったね？」と、しのぶくんがさけんでいます。「おう、わかったあ」とこたえてしまいました。その声をきくと、しのぶくんは「いってきまーす」とはして、学校にむかいました。「あ〜あ、子どもと約束したけん、いかなねえ」と、おかあさん。坂本さんは、しぶい顔をしながら、仕事へとでかけました。

会社についても、気が重くてしかたありませんでした。すこし早くついたので、みいちゃんを、そっとみにいきました。牛舎にはいると、みいちゃんは、ほかの牛がするように角をさげて、坂本さんを威嚇するようなポーズをとりました。

続きはお子様からお聞きください。

